

農の造形表現 「稲（命の根）」 コンセプト

2007年12月1日 九州大学 知足美加子

九州大学社会連携事業「芸術文化を取り込んだ先導的な食育と地域農産物のブランド化」には、初回から彫刻家として関わってきた。今回は「お米の地産地消、粕屋米のブランド化」がテーマである。

「稲」の語源は「命の根」とする説がある。「一粒も米を無駄にしてはいけない」など、主食である米に対して日本人は深い畏敬の念を抱いてきた。土が稲に姿を変え、命を支え、死によって命は土に帰る。農耕生活は宇宙の運行や天候の変化を身近に感じさせる。その日々の積み重ねの中で命を生み出す天地と稲の営みは神格化されてきたのである。今回のインスタレーションは、再生を繰り返す自然界の命の営みを「稲（命の根）」に象徴させて展示する。

素材は、米、ヌカ、塩、そして粕屋名産であるミカンの葉、バラ等である。古くから米と塩は神前に奉られるほど大切なものである。造形表現内でもそのイメージを損ないたくない。自然の諸要素、宇宙の運行などを意識して、五大思想（地・水・火・風・空）、金剛界曼荼羅（成身会）、荒神八方除神札、八色和幣等の図像を参考にした。

展示会場では藤枝守氏作曲による「植物の声」としての音楽が、琴によって演奏される。自然と共にある時の充足感や安らぎを与えてくれる琴は、神の依代（よりしろ）とされていた。言霊思想の「ことのは（言の葉）」は「こと（琴）」に通じるという説もある。（『言霊』鳥居礼・著）

稲と同様に、琴の神聖さも作品内で表現できればと考えている。

環境問題が深刻化する中、社会的側面での様々な取組がなされようとしている。「食」への意識は、環境問題も含め世界の社会動向を左右するほど重要なものとなっていこうだろう。その局面を前に、まず私たちが取り戻さなければならないものは、風土と生活に密着した神聖なる精神空間ではないだろうか。この造形表現は、その問いかけである

